東光寺の馬頭観音

馬の病気と道中の安全を祈る仏様

［石川郡玉川村北須釜］

馬とともに生活する人々の中に馬の無病息災を祈る民間信仰が生まれた。あぶくまの各地に、今も数多く残る馬頭観音は、その表れだろう。

農家では農耕馬の、馬の産地では生まれ育つ仔馬たちの健やかなる成長を願う。馬で稼ぐ人々にあっては、馬と歩む道中の安全を祈ったり、また道半ばで力尽きた馬の冥福を祈る。馬＝乗り物＝道のつながりで、道祖神のように道端に祀られ、馬の無病と安全を祈る仏様としても信仰された。

馬頭観音は、インド神話に登場するヒンズー教最高神の一人、毘紐挙（びしゅぬ）が馬に化身して悪魔に奪われたヴェーダ（インド最古の聖典）を取り戻したという説話が起源となったという。観音様が煩悩を除く力を、馬の速さと馬力になぞらえた仏様とも言われる。

頭が馬になっていたり、馬の頭を冠のように載せているのが特徴。三面六臂または三面八臂（顔が3つ、腕が6本か8本）の姿が多い。多くは悪を滅ぼすにふさわしい憤怒の表情をしていると言うが、東光寺の馬頭観音の表情は、どこか穏やかで微笑ましくさえ映る。

畑のはな

［オクラ（アオイ科トロロアオイ属）］

日本語の野菜の名のように聞こえるが、英語の「okra」をそのまま読んだもの。原産地アフリカからアメリカを経て、幕末に日本に入ってきた。ネバネバのパワーが注目されて人気上昇。小さい体に大きな栄養素を秘めた野菜だ。